



おだ学園保育園通信



暑い夏はセミの鳴き声から始まりました。

多摩市は緑豊かな街で、今では朝からセミの声で起こされるほどに賑やかに聞こえてきますね。

【探求心】

「さようなら」と帰ったはずのFちゃんとお母さんが戻ってきました。

手にはビニール袋に枯れ葉となにやらモソモソと動いている生き物が。

お母さんは虫が出てこないようにしっかりと口を握りしめてモソモソと動く虫を見てこれなんでしょう？

木に登っている様子を不思議でじっと見ていたのですが連れてきました。

先生たちもなに？なに？と顔を突き合わせじっと見てみるとこれから脱皮するために木に登っていたセミの幼虫でした。



Fちゃんとお母さんの探求心の始まりです。不思議、なに？なんだろう？園の人たちにも見てもらおう！その興味や関心が子ども達を育てます。Fちゃんとお母さんと先生たちも一緒にその動いている生き物の正体を探り実感するなかで探求心を共有することができました。母「わたし、虫が嫌いなんです」とおっしゃりながらFちゃんと一緒に外に戻しに行ってくださいました。

セミは、つかまえたものを飼っていても、なぜかすぐに死んでしまうそうです。しかし、セミの幼虫は、土の中で、何年も何年もかかって育ちます。たとえば、アブラゼミは、土の中に、丸6年間もすんでいるようです。ところが、幼虫のときが過ぎて、土から外に出ると、あっという間に死んでしまうのだそうです。

幼虫のときの殻を脱ぎ捨てて、成虫になったセミは、卵を産んで自分の命を次に引きついでいくという大事な仕事が残されています。ところが、それをごく短時間に済まさなければならないということで、このひみつは、セミの体にあるそうです。親になったセミの体は、雄は飛ぶことと鳴くことだけに、また雌も飛ぶことと卵を産むことだけに、都合よくつくられているので体が、長生きするようにはもともとつくられていないのです。親のセミは、せいぜい10日から2週間の命で、その時間を生きるために、木の汁を少しすうだけ、親ゼミの仕事は、卵を産むことだけなので、その間生きていられればいようです。ですから、親のセミは長生きしないとのこと。このセミにとって成虫となりこれからの短い命、子孫を残す役割をもって脱皮して放たれたことを祈ります。

園内は今年もセミの羽を背に付けている子や胸にブローチのように自分で選んだセミを切り抜いてもらって付けている子など夏真っ盛りです。

【夏野菜】



先日E君のご親戚の畑から大きなカボチャが届きましたと園にも登場。幼児さんにとってはナスやトマト、トウモロコシ・・・と畑がとても身近になってきています。このカボチャも畑でとれたんだね。おおきいね～おもいね～としばらく手に取り飾られてからみんなのお腹の中に…調理さんが天ぷらやフライにして変身して夏野菜を満喫しました。「ごちそうさまでした」。相澤農園にも種から蒔いたオクラの収穫がそろそろ待っています。暑さと相談してでかけましょう。食育につながっています。

【職員のお知らせ】

※庄内加奈先生…7月29日無事女兒が誕生しました。おめでとうございます！森、宙、星組の人たちはお腹の中の時からエコー写真で親しみがあったので、今度お目にかかる日が楽しみです。

